

## 文化委員会

## 作品紹介ニュース

2026年6月号



文化委員会がおすすめる書籍・映画などをほぼ隔月でお知らせしています。

今回の作品は『ぼくが子どものころ戦争があった～

「いくさの少年期」より～』です。

原作：田中 幹夫 文：寮 美千子 絵：真野 正美

刊行日：2024年7月

出版社：ロクリン社

価格：2420円（税込）

注～ニュース掲載当時の価格です。変更している可能性がありますので、予め確認をお願いします。

「おばあちゃん、どうして日本は戦争をしたの？」

8歳の私が尋ねると、いつも朗らかな祖母が、急に暗い顔でポツリと言いました。

「バカだったんだよ。みーんな、バカだったんだ」

明治生まれの祖父は戦争について一切語らず、祖母が語ったのはこの一言だけ。

先日亡くなった親戚も、亡くなる数年前に、青春を奪われ軍需工場で過ごした日々を勇気を振り絞って語ってくれました。

「何があっても子どもを戦争にやっては絶対にダメよ」と。

彼女たちが見ていた景色を「戦争を知らない私」が娘にどう伝えたら良いのだろう。

先日、絵本専門店『ひだまり』で手にしたこの絵本が、その景色を私におしえてくれました。

昭和16年12月8日、ラジオの開戦ニュースから始まり、原作者が少年時代に目にした戦時下の生活が克明に描かれます。「日本は神の国。絶対に勝つ」と教わり、街の景色が「金属類回収令」や「建物強制疎開」によって変容し、「学徒動員」「軍事訓練」などで子どもたちの日常までもが否応なしに戦争に侵食されていきます。

昨今 SNS では、「日本を守るため」時代に合わせた憲法改正を叫ぶ声が溢れています。しかし、実質的な食糧自給率も輸入資材なくては10%を切る、少子高齢化で人手不足、社会インフラの維持すら難しいこの国で、防衛費だけが膨らみ続けています。誰がどうやって守ろうというのでしょうか。国家権力の暴走に歯止めをかける憲法が壊れかけている今、私たちはどんな未来を手渡せるのか。

戦争は、いつの時代もどんな大義名分があろうと、国家の決定によって罪のない人同士が殺しあう事です。多くの先人たちが口を閉ざした沈黙の重みを受け止め、親子で繰り返し読みたい一冊です。

(文化委員/S.N)